なぜ都市を問題にするのか
都市民俗学のフィールドワークのこころざしに関連して

Why Do We Treat Urban Community as a Question

森栗茂一

❶なぜ都市研究なのか
❷都市のフィールドワーク
❸都市を見る目
❹なぜ都市民俗学なのか

[論文要旨]

日本の都市研究は，高度経済成長のひずみ，社会問題の反省として発展した側面がある。しかし，十分な議論のないまま，現実の日本の都市の生活は個別分断の消費に突入し，市民の連帯を発見できないでいる。国立大学共同利用機関の都市の共同研究としては，こうした都市の今日状況を視野にいれて，研究の志を立てねばならぬ。子供の自殺や暴力にみられる今日の状況は絶望的である。都市民俗学としては、こうした状況の都市をどう把握するのか，新たな都市の再構築にむけて展望を示す必要がある。

本論では，阪神大震災を契機として，都市の連帯のあり方を問いなおした三人の映画監督・映像作家との会話のなかで発見したことを記述した。震災のなかで活動する人々を撮影するなかで，ふれあう町の可能性をみつけた熊谷博子監督。焼け落ちた町が復興する過程を定点観測しつづける青池憲司監督は，魅力的な個人ではなく町の連帯，人間の町がつくられていく動態を記録しようとしている。また，篠田正浩監督は，災害や戦災にいっても生きつづけようとする人々の力，独立市民の登場に期待してカメラをまわしたという。

これらの動きは，本当の意味での都市の誕生である。都市民俗学としては，こうした人々の動き・新たな市民連帯の芽吹きを発見し，観察・記録し，新たなまちづくりに貢献せねばならない。

都市史研究も，研究テーマがあるから研究するのではなく，何故その研究をせねばならぬのか，問われている。そうした，社会に志を問う共同の研究をせねば、研究の意味はない。

何のための共同研究か。何のための共同利用機関なのか。

誰のための研究なのか。誰に訴えたいのか。

❶……なぜ都市研究なのか

1930年代の産業化により，都市住まいが一般化し，60年代の高度経済成長期で過密都市が問題になった。公害や人口過密は，成長経済のひずみと受け取られ，70年代にはその反省としての生活主義の日本文化論としての日本民俗学がブームとなった。一方で，故郷に「帰りたい、帰れない」心を語るフォークソングが台頭した。フォークソングのテクニカルタームは「ふるさと」であった。70年代は Folklore の時代であり，柳田ブームも，この延長線上にあった。

ところで，同時代の学園紛争の挫折の結果，左翼的言説・言葉そのものが空虚となり，我々の足元の風景を問いかける指向がなされた。たとえば，我々の人類の発展志向のなかでの環境破壊の問題を問うエコロジー活動が発展してきた。また一方で，そもそも我々の住んでいる都市とは何なのかという人々の疑問が，多くの都市論を輩出せしめたのではなかろうか。網野善彦・石井進・阿部謹也をはじめとした80年代都市論は，この国のこの時代の必然のなかで，提出されたものである。

しかし，かつて「城下町民俗学」とも揶揄されていた都市民俗学や，「お祭り同好会」とも陰口されることもあった都市人類学をも含めた，広義の都市研究は，はたして都市を語る言葉を発見できたであろうか。都市に生きる意味をこの学問からみいだせたか。十分な発見ができなかったとすれば，都市史研究の何が不足であったのか。国立大学共同利用施設の都市に関する共同研究は，その総括から始めねばならぬのではないか。

都城の遺構が出たからといって，即，都市研究たりえるか。都城と中世の市とはどうつながるのか，つながらないのか。日本人の都市性とは何なのか。そこが知りたいのである。

ここでは，都市研究の意味を，もう一度問いなおし，現代の都市に生きる我々として，どんな研究が要請されているのかを，都市民俗学の立場から考えたい。

❷……都市のフィールドワーク—「まなざし」から「こころざし」の時代へ—

以下は，本務校の「開発・環境野外実習」の，フィールドワーク論の最初に配った文章をもとにしている。都市民俗学のフィールドワークの意味を，学生とともに討論しようとしたものである。

(1)学生諸君へ

フィールドで何をするのか。単なる勉強か。趣味か。単なる趣味なら，これほど他人に迷惑をかける趣味は他にない。悪趣味といえよう。調査公害だ。いや理想の運動のためのフィールドか。

運動なら，高い理想と原則を主張し，負けることを美徳として自己了解的に，孤高に向かうことも可能であろう。差別・排除・拒否のまなざしにレジストして戦うことも，気持ちのいいものだ。全共闘時代のやくざ映画のごとく……。が，そうした闘争は，権力にとって，一種の免罪符・レクイエムたりえてしまい，間違った流れを加速することはあっても，それを阻止したり，流れを変えることはできない。そうした運動はともすれば，机上論理に陥り，現場から遠いひとりよがりの評論になることが多い。

むしろ，中間セクター的な意味での民間からの政策提言の運動論でいえば，現場の情報を集め，

現場の声に耳を傾ける能力，いわば地を這うような調査能力が強い武器になろう。現場を知る者だけが語れる説得力ほど強いものはない。現場感覚という武器の政策的使用においては，標的のバーを低くし，多くの人と連帯，場合によっては行政に関わる一人一人の人間の良心の部分とも連帯できるような，幅の広い姿勢が重要となろう。

そうした能力の上にたった専門能力が問われる。政策提言や社会的応用においては，歴史家や民俗学者の専門性にもとづく視点も必要となることもある。さらには，その能力をどのような「ため」に発揮したいのか，アカデミズムの側の「志（こころざし）」が，次に問われるのである。

(2)近代の「志」から，ポストモダンの「まなざし」へ

明治の官僚を目指した人々，1930年代の産業化のなかで都市に向かった人々，「志を果していつの日にか帰りみん」といった人々は，モノとカネを求め続けた近代の結果，モノが有り余る消費都市を作った。村を離れて花の都に出れば，藤山一郎が歌う「楽し都，恋の都」が待っており，昨日より今日が，今日より明日が豊かであると確信できた近代があった。しかし，我々は幸福になれたのであろうか。70年代，太田裕美が歌ったフォークソングの歌詞には，恋人を振り切って都会の絵の具に染まった青年が唱われていた。都会に出た青年は，果して涙ふく木綿のハンカチーフを，故郷に残った彼女にプレゼントすることができたであろうか。

都市を漂泊し，かといって故郷にも帰れない人々は，結局，都市周辺の湿地帯や河原・浜や谷のバラック集落や長屋集落に肩を寄せ合った。それを他人はスラムとよび，部落とよんで忌避し，不当な扱いをした。

結局，科学技術とそれを利用した産業の発展が，財（とくに住居と土地）を持たない人々を抑圧しだしたとき，デリダやドゥルーズなどポストモダン議論を横にらみしたアナール社会史学は，人と人との視線の問題，差別にもとづく「まなざし」の議論を始めた。

日本では，70年代のポストモダン論が安定成長のなかで展開したのであるが，結果として真摯な議論を回避し，単なる流行りのディスクールに終始し，高度経済成長の残り滓を消費しつくしたといっては言い過ぎだろうか。日本のポストモダンは何も生み出せないまま，時代の寵児であった京都大学人文研究所助手を同経済研究所助教授に栄転させて収束した。

都市をめぐる「まなざし」の問題は，ついに語られず，空虚な流行の都市論だけが流布したのではなかったか。

(3)幸福の都市はありますか？

日本人は幸福を求めて「志」をたてて，村を後にした。しかしそこには幸せはなかった。柳田國男は「家の永続」の冒頭で，

> 珍しい事実が新聞には時々伝えられる。門司では師走なかばの寒い雨の朝に，九十五歳になるという老人が只一人傘も持たずにとぼとぼと町を歩いていた。警察署に連れてきて保護を加えると，荷物とては背に負うた風呂敷包みの中に，ただ四十五枚の位牌があるばかりだったという（略）　〔柳田國男『明治大正史世相篇』〕

ときに，1929年。農村恐慌の前夜，産業社会の嵐は村社会を崩壊に追いやり，こんな年寄の旅をさまよう者にも位牌しか頼る物を持たせなかった近代がそこにあった。

柳田國男が主催した「山村海村調査」においても，柳田はその調査項目の最後の第百項目で「幸せの村はありますか」と問うたのであるが，近代の村に「幸せの村」などどこにもなく，むしろ不

幸な記憶ばかりが村によどんでいたことを，データを整理した大間知篤三は詠嘆している。

都市生活で幸せな近代家族を目指した都市人は，果して幸せを手にいれられたか。何とか引き当てた2DKや，ローンで摑んだニュータウンの戸建住宅には男の姿はなかった。団地妻の近代への憧れは，夫が産業社会の奴隷となった不安な団地空間で，引き裂かれる。ロマン・ポルノ『団地妻昼下がりの情事』では，仕事でやつれた夫が，白川和子演ずる団地妻から逃避する姿があり，その埋め合せが昼下がりの情事へと展開する。何やら近代家族の破綻を暗示している。

現代ではその家族さえ解体した。お父さんは単身赴任，お母さんはカルチャーに，ぼくはクラブで，お姉さんは塾へ……。その子供たちも30年たって団地を巣立った。90年代の千里ニュータウンは，建替え困難な不良住宅に、独居老人が居残る町になってしまった。分断された消費社会において，家庭はますます空虚だ。夫婦が向き合い，親子が人間として語りあうことが不可能な個別社会のなかで，我々は生命維持装置としてのコンビニと，排出装置としての下水に護られて，一つ屋根の下の個別生活を，さも家族のようなふりをして生きている。

結局，地域で生きる姿を失い，都市に生きる場を作れなかった我々には，消費者としての分断された所有金主主義しかなく，生きる町など作れなかった。都市にはお上に対する従順か，さもなくばレジスト・要求しかなかった。

思えば1955年。日本経営者協会が生産性向上をめざした年，日本共産党は「諸要求貫徹」路線を打ち出した。それから50年。我々は右も左も，資本側も労働側も，金とモノを巡って集団としての取り合いに終始してきた。個人で生き方を判断し，考えることをしてこなかった。その結果としての，労働組合の弱体化と家庭崩壊，都市のスプロールとインナーシティーの空洞化，官僚支配の堕落というのでは，この日本の戦後近代とは何だったのか。

リアリティーのない病院の死，「ちょっと向こうにいって来る」といって自殺する子供たち，人の命を命とも思わぬいじめ，労働者狩り，そして，神戸のニュータウンにおける連続幼女殺害事件の犯人として中学生が捕まるという事実……。

ぼくらの近代のいきついた先が，子供たちにこんな絶望しか与えないとするならば，今ぼくらの住む都市とは何なのか。もう一度，暗澹たる思いで問わねばならぬ。

(4)神戸の「こころざし」

絶望の1995年，震災で神戸は上下水と電気・ガスという生命維持装置に頼る近代人の弱さを思い知った。住宅ストックのひ弱さのなかでの浮ついた消費社会とは，ティッシュ一枚の豊かさであることを思い知った。スラム・部落の多いインナーシティーの長田が大火災にあったのは必然であった。人が死ぬことのリアリティーにうちひしがれ，瓦礫を彷徨した神戸市民こそが，我々の新たな都市の生き方「こころざし」を提示できるのではないか。それは，日本の都市の未来像ではないか。そういう意味で，私は震災復興のまちづくりに関わる，震災民俗学の調査を実践している。

仮設住宅のかそけき呻きに耳をすませよ。同じ町の住民同志が反目しあうまちづくりの苦しみの姿に眼をやれ。「被災者公的支援」「個人保障」それも大事だ。それがなければはじまらぬ。しかし，そうした大文字で語られる「金さえあれば」の向こうにある絶望。

それにかき消されようとする新たな生き方の芽吹き，人々の連帯の「こころざし」とそれを支えるまちづくり専門家集団のネットワーク。プランナー・建築家・医者・政治家・ボランティア，そ

して都市民俗学者…。

この「こころざし」の連帯は，日本の都市社会を変え，真の市民社会の発芽だと自負している。

❸……都市を見る目—映像作家の視点—

阪神大震災は，極めて映像的な事件であった。ヘリコプターで空撮される近代都市の崩壊の姿が，世界中にショッキングな映像として伝わり，映像が事の大きさ，生活基盤の薄弱な日本の近代都市を見事に描いた。このとき，フィールドワーカーは何ができたか。長田に生まれ育った民俗学徒としての私は，この故郷の現象のなかから，自らの育った近代都市を問う仕事をせねばならなくなった。

同じころ3人の映像作家が，相次いで被災地入りをしていた。彼らは何を見，何を感じとったのであろうか。外から来た彼らのフィールドワークの視点を通して，日本の近代都市の位置づけを考えてみたい。

(1)青池憲司監督の場合

映像作家青池憲司は，スペインの子供たちの共和国，ベンポスタを記録し，共同体を描いてきた。

震災後11日目から，記録映画を撮りはじめた。長田区のカソリック鷹取教会のなかの「青池組」の小屋に住み込み，徒歩15分圏内の町をみつづけてきた。マスコミが多用したヘリコプターからの視点ではなく，瓦礫の中の彷徨から記録しはじめた。蟻の眼である。

青池は，『記録のための連作「人間の町」～野田北部・鷹取の人々～』の第1部で，焼け落ちた町を延々と映している。第二部では，まちづくりに苦闘する人々，焼け跡の瓦礫から「宝さがし」をする人々をゆったりとした時間で映している。第四部のまちづくり協議会の住民集会の映像では，地権者とまちづくりをすすめる人々とのぶつかりあいが描かれている。

青池は，人々の生活の中に入り込むなかで，魅力ある個人より，地域共同体のような集団の魅力を描きたいという。日本の社会は，人々の地域共同を作ってきたのか。それを点検する作業から，日本の民主主義の可能性を検討したいと考えているようだ。

戦後の日本の民主主義は，まずアメリカから国に入り，自治体に下ろされ，人々に下ろされた。しかし，この官製民主主義は形式化していた。むしろ，被災地では自治とか自立とか自活，お互いを尊重しあった生活があった。これは下からの新たな民主主義の教訓ではないか。そういう，魅力的な集団を描いていきたいと青池はいう。それは戦後日本のなかで，腰砕けになった部分であり，なかなか見えない部分であるが，映像作家青池はそこを見つめる覚悟をしている。

(2)熊谷博子監督の場合

映像ジャーナリスト熊谷博子は，命のはぐくまれる東京向島を観察して映画『ふれあう町』を作った。

熊谷は震災後10ヵ月目から，長田に入ってきて，地域のなかで結びつく人々を描いていった。『ふれあうまちのために～向島・長田・そして私のために～』は，震災一周年の人々の輪の中に入った映像であった。震災一周年の菅原市場での早朝の追悼行事を撮影するマスコミの乱暴な姿勢に違和感を覚え，むしろ，撮影対象によりそう映像を撮りたいと思うようになったという。撮るというより「ふれる」ことで，被写体とともに痛みを共有する姿勢を持ちたいという。

しかし，ふれられて気持ちの良い「ふれる」という行為は何か。震災とか，震災一周年行事などの非日常ではなく，普通の日常生活のなかで「気持ちのよいふれあい」としての撮影，フィールドワークとはなかなか困難なことではなかろうか。単に，長時間現場に入りこんだり，参与観察すれば良いというものではない。むしろ，その現場で起きている問題が，自分の生き方にとってどうなのか。同じ時代を生きる人間としての共感をつむぐ姿勢が，より求められるのではなかろうか。

映像ジャーナリスト熊谷博子は，今，長田区の民間デェイケア施設「駒どりの家」に入り込み，高齢者やボランティアとふれあいながら撮影を続けようとしている。

⑶篠田正浩監督の場合

映画監督篠田正浩は，『瀬戸内少年野球団』『少年時代』など戦後の原風景を描いた少年三部作や『心中天網島』『離れ瞽女おりん』など，日本文化の深部を描き続けてきた。

『瀬戸内ムーンライトセレナーデ』は少年三部作の完結編で，戦争で長男を失った一家が，遺骨を故郷に納める旅に出るなかで，戦災後の神戸を見る。満員の一つ同じ船に乗り合わせた根無し草の人々が，互いに気づかう姿は，避難所や仮設住宅で助け合う人々と同じである。そうした一夜を演出するのは，コーディネーターとしての闇屋（キャスト：高田純次）であった。

故郷を捨ててもパブリックに生きる。お互い融通しあって，ともに生きる都市を作るためには，町のコーディネーターがいると篠田はいう。都市をフィールドワークして人々と関わり，その結果をまちづくりに生かす私の応用都市民俗学の実践としての震災民俗学とは，まさにこの闇屋の立場ではないか。そういう役割を果たしたいと思うのである。

神戸は昔から，遠くから海を越えてやってきた人々が住み着いた。多用な視点を持っている。神戸の破壊と再生，戦災と震災は，新たな社会の視点を生み出すのではないかと，篠田はいう。

しかし，現実には，震災で撒かれた連帯の種は芽生えたものの，まだ育たない。むしろ踏まれて枯れそうである。しかし，聞こえてくる新たな声，地べたにはってでも生きる強い人々，小さくとも自分で生きる尺度を持つ人々に，都市民俗学者は焦点をあわせたフィールドワークしたいと思う。

篠田はいう。みながどうやって独立市民になろうかと考えてきた戦後50年ではなかったか。しかし，日本人は一度だって，国家を脱して自立して生きたことはなかった。お上に対する要求でしかなかった。自分の生活を自分で作る尊厳ある生活，物はなくとも尊厳を持って生きる魂を持っている姿。個人の土地所有，陣地とりではない生活がつくれなかった。しかし，神戸では新たな都市像が出るのではないかという。

『瀬戸内ムーンライトセレナーデ』では，篠田は戦災を経験した少年に，長じて震災後の神戸を歩かせている。戦災と震災を二重写しにし，そうした災害のなかでも，自立して生きていこうとする人々に期待を寄せている。50年前の焼け跡には，自分たちの生活をつくろうという希望があった。破壊の後は再生を予感できた。ジャズのスイングが焼あとのなかから聞こえてきたという。

❹……なぜ都市民俗学なのか

柳田國男は「都会は大きな田舎だ」というふうに表現している。しか，それは都市ではなかった。日本は都市化を経験して百年になるが，都市はいまだ生まれていなかった。いつでも故郷に帰る気

持ちのある田舎人が集まった「都会」はあったが，「都市」はなかった。

日本人はまだ都市の答えをみていない。3人の映像作家が提出した震災記録は「都市が民主主義の答えでもあり，ともに暮らす都市がどのように作れるのか，その芽吹きがどのように現れるのか」という共通の思いでもあった。人々のなかにある新たな住まいや環境・子育て・福祉など，命に関わる生活についての連帯を，どう発見していくのかという意味では，都市民俗学と共通する視点である。

自立した個人がふれあって作る都市，人々が誇りを持って生きれる故郷を創世する作業に，都市民俗学が関わる必要がある。人々の新たな生き方のかそけき声に耳をとめるという都市民俗学のフィールドワークと分析は，新たな都市社会構築の武器にならねばならない。

学問のために，学があり研究機関があるのではない。都市に住むことの意味を現場から考えるために学問があり，その学の共同のために研究機関があるのだ。

もう一度，問おう。

なぜ都市を共同研究の問題にしたのか。

なぜ，今，都市なのか。

誰のための都市研究なのか。

本稿の考え方にもとづいてNHK教育テレビ『未来潮流　都市民俗学者森栗茂一の都市を視る眼』（1997年放送）を制作した。出演いただいた三人の監督，カメラマンはじめクルーの皆さん，河内ディレクター他NHK教養番組部の皆さんに，紙上をかりてお礼申し上げたい。

参考文献

関　一敏　1993　「しあわせの民俗誌・序説」『国立歴史民俗博物館研究報告集』第51巻
高岡弘幸　1993　「「都市人」の民俗学のために」森栗茂一篇『都市人の発見』木耳社
坪井洋文　1986　「故郷の精神史」『日本民俗文化大系』第12巻　小学館
阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク編　1995～6　『阪神大震災　復興市民まちづくり』第1～8巻　学芸出版社
森栗茂一　1993　「「都市の発見」「民俗学」の発見」『京都民俗』第10号
森栗茂一　1993　「現代のイエと祖先」『都市人の発見』木耳社
森栗茂一　1998　『幸福の都市はありますか～震災神戸と都市民俗学～』1・17通信ブックレット　鹿砦社
柳田國男　1970　「家の永続」『明治大正史世相篇』（『定本柳田國男集』第24巻　筑摩書房　所収）
吉岡　忍　1997　「子供の死生観」『現代の世相』第4巻　小学館

（大阪外国語大学外国語学部，国立歴史民俗博物館共同研究員）

Bulletin of the National Museum of Japanese History
vol.78 March 1999

Why Do We Treat Urban Community as a Question: In Connection with the Aim of Urban Folklore Field Work

MORIKURI, Shigekazu

Urban history research of Japan appeared as correction and reflection of the strain of the vigorous economic growth. But, without enough discussion urbanization of Japan has come to be an individual consuming life and to miss the solidarity as an urban community.

To begin with, *kokorozashi* 志 [a will] was a thing when the people of Meiji 明治 era and the early Shōwa 昭和 era left their villages for the purpose of the success in life. But, numerous failures was the result. This brought up new discrimination among people. Slums are an example here as a reflection of modern society, a point of view of social history through *manazashi* まなざし [a look]. However without putting such a research of discrimination theory to practical use, read urban communities are not a place. Where we are under the solidarity among people, but aggregates of individual lives which require 'money' and 'things'.

Kōbe 神戸 which experienced the Hanshin Daishinsai 阪神大震災 [the earthquake disaster in Hanshin district], the setting up of solidarity in the urban communities appears in revival of the town, with planners, architects, statesmen, volunteers, and folklorists working together. The field work of the urban folklore which can contribute to urban planning, and like environment, education, residence, welfare, the investigation, research, proposal about parts concerning life, aiming this sort of new city joint is necessary.

After Hanshin Daishinsai, as a result of discussion between me and three movies directors who made the movies about an earthquake disaster, we know that this point of view of urban folklore and the research asking joint among cities corresponds to asking the democracy of Japan in another sense. Usual, the democracy of Japan was transferred to the government from the U. S. A. Because of the defeat of war, and forced on district self governing body from the government, and granted to residents. Another from that, we can see the work making democracy from joints among residents in Kōbe 神戸 after the earthquake disaster.

This is the birth of cities in real sense. The urban folklore is the fieldwork which finds out this kind of new way of life of the people. Moreover, urban folklore should become the tool which contributes the creation of the city to come. Such a will is more necessary than any other things to the urban folklorists.